

生活介護を利用する重症心身障害者を対象とした「行動に焦点化した支援計画」の実施

—障害者本人への影響と支援者の協働への影響の検討—

Implementation of a "behavior-focused support plan" for severely mentally and physically disabled person who use life nursing care.

Examination of the impact on the persons with disabilities himself and the impact on the collaboration of his supporters.

○尾崎怜子・谷千聖・中鹿直樹

○OZAKI Reiko・TANI Chisato・NAKASHIKA Naoki

(立命館大学人間科学研究科)

(Ritsumeikan University, Graduate School of Human Science)

Key words:行動分析学, 重症心身障害者, 支援計画, 支援者支援

目的

重症心身障害児の卒業後の進路として生活介護事業所(以下:生活介護)のニーズが高まる一方でコミュニケーションの困難さから生活介護側が受け入れに難しさを感じていることが明らかになっている。医療看護・障害福祉分野では、以前より障害者の行動観察から本人の意思を読み取る試みが行われてきた。しかし、観察不可能な「意思」等を行動の理由とした支援では解釈の不確実性や相違から、一貫性のない支援に結びつく可能性がある。そのため本研究では、生活介護を利用する重症心身障害者を対象とし、行動分析学に基づいた「行動に焦点化した支援計画」を実施し<目的①>本人の行動変容への影響と<目的②>支援者の協働に関する影響を調べた。

方法

<対象者>19歳2ヶ月の男性。障害分類は児童福祉法上の重症心身障害者、大島分類では最重度。近くを通る人の顔や動きに対して注視や追視することができる。

<手続き>家庭と、対象者の利用している生活介護A・Bの三者で支援者会議を行い、各場面で実施可能な共通の支援計画(目標行動①本人が他者と目を合わせて注視する、笑顔を出す/目標行動②本人が自分の手を注視する、または刺激入力の際に常同行動、咳込みを止める)を立案した。その後、その三場面で支援計画の実施と記録を行った。分析対象は、支援計画の実施記録(目的①)、終了後のアンケート(目的②)、補足として家庭とA・B事業所との連絡帳を使用した。

結果・考察

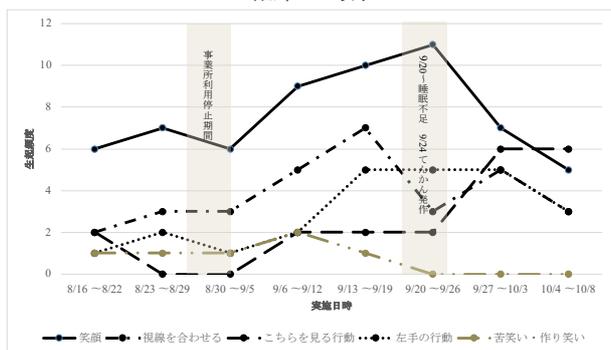


Figure1 目標行動①の実施で得られた行動の生起頻度の推移

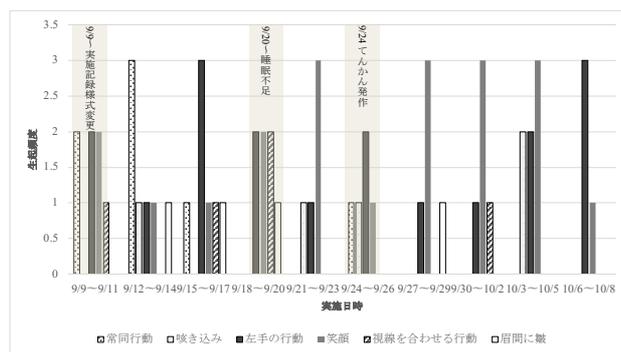


Figure2 目標行動②の実施で得られた行動の生起頻度の推移

<目的①>介入により「笑顔」「注視」といった行動は増加し、同じく支援者からの関わりに対する反応として「左手の行動」も増加した(Figure1:Figure2)。これは介入により本人の行動が拡大した可能性が考えられる。また、実施記録には、「左手の行動」の様々な形態が報告されると同時に「顔を向ける」など別の身体の行動も観察された。このことから「左手の行動」の拡大によって、対象者の他の身体機能にも影響があった可能性がある。

<目的②>終了後アンケートから、支援者が対象者の行動や自らの反応などについて支援者同士で話し合い、客観的な振り返りを行っていたことが明らかになった。そこでは新たな支援のレパトリーも生まれた。支援者が対象者の行動の変化に気づき、それにより対象者の今後の発達にも期待を持ち、支援者自身の継続的な支援の動機づけに繋がったことも示唆された。

以上から、本研究は生活介護における重症心身障害者の支援において、「正の強化を受ける行動の機会を持ち、その選択肢が増大すること(望月, 2001)」が表現できたと考える。

参考文献

望月昭 (2001). 行動的QOL:「行動的健康」へのプロアクティブな援助. 行動医学研究, 7(1), 8-17.